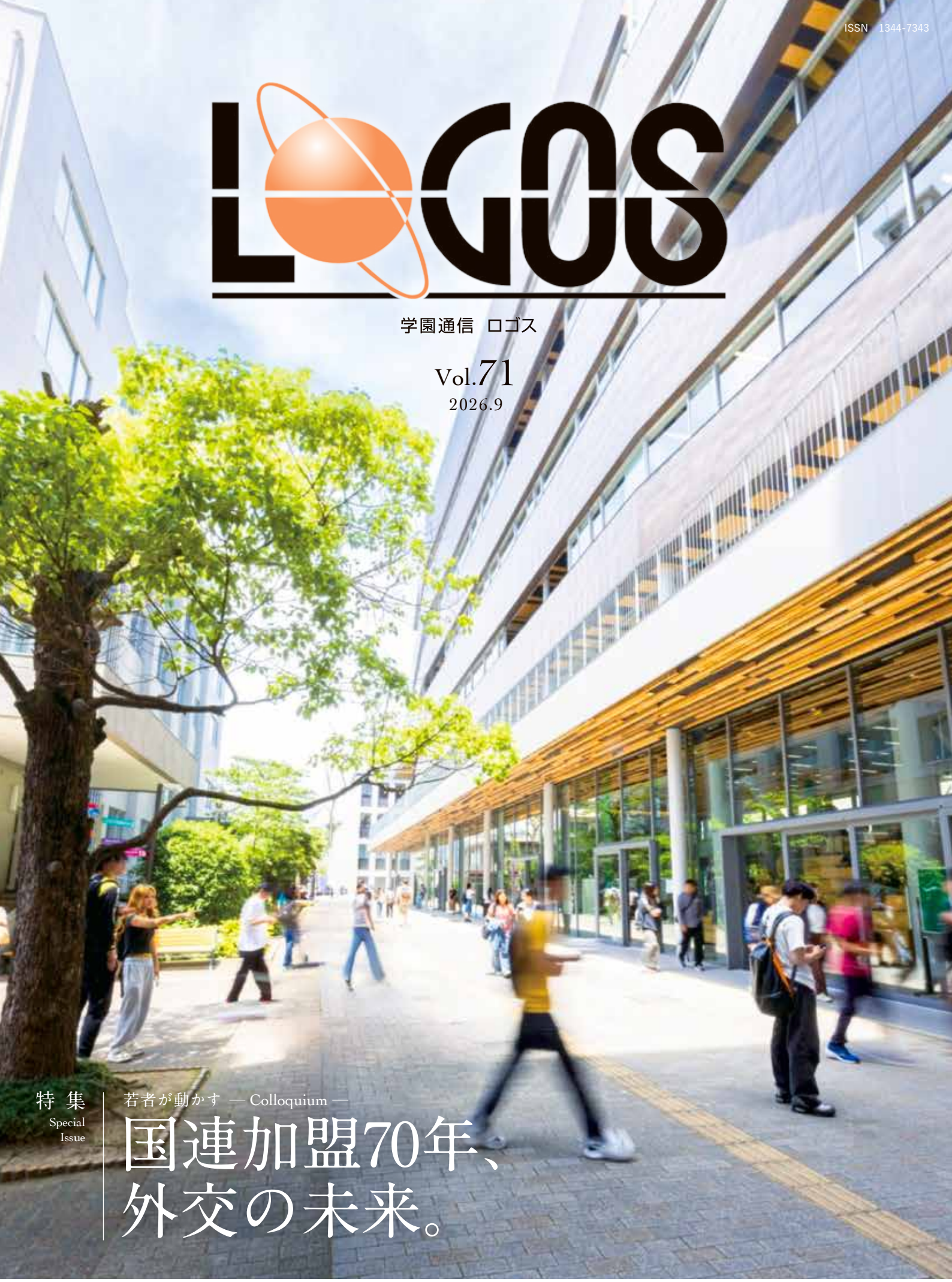
ISSN 1344-7343

LOGOS

学園通信 ロゴス

Vol.71
2026.9



特集 Special Issue

若者が動かす — Colloquium —

国連加盟70年、外交の未来。

学校法人 京都外国語大学



2026年4月1日より京都外国語大学・京都外国語短期大学の学長に就任いたしました。この紙面をお借りして、皆さまに謹んでごあいさつ申し上げます。

世界は常に、二つの可能性のあいだに立っています。一方は、対立と分断へ向かう世界。もう一方は、理解と協働へ向かう世界。この二つの世界を分かつものは何か――それが、言語です。言語は単なるコミュニケーションの道具ではありません。異なる文化や価値観を持つ人間が互いを理解し、尊重し合うための、人類が長い歴史をかけて育んできた知的基盤です。本学が創立以来掲げてきた建学の精神「PAX MUNDI PER LINGUAS（言語を通して世界の平和を）」は、まさにこの確信を言葉にしたものです。

「AIが翻訳してくれる時代に、なぜ外国語を学ぶのか」という問いを耳にすることもあります。しかし私はこう考えます。機械が言葉を「処理」できるようになったからこそ、人間が言葉を「使う」とはどういうことかが、より鋭く問われる時代になったのだ、と。言葉の選び方に滲み出る人柄、沈黙の意味、文脈の温度――それらは、相手を「人間として」理解しようとする姿勢から生まれます。その分岐点で力を発揮するのは、言語を通じて培われた人間の感性と判断力にほかなりません。

本学は現在、KUFS VISION 2027のもと、「外国語を学ぶ大学」から「外国語で価値を創る大学」への転換を目指しています。語学教育の深化とAI活用、海外留学・留学生受け入れの拡大、社会連携の強化、5万人の卒業生との新たな絆の構築――変化の時代を「変わるチャンス」と捉え、本学が積み上げてきた教育の力を社会へ還元してまいります。

一方、京都外国語短期大学については、18歳人口の減少と四年制志向の加速等により、2027年度より学生募集を停止することを決断いたしました。70余年にわたる短大の歴史と、そこで育まれた教育の精神は、これからも大学が誠実に受け継いでまいります。

2027年度に創立80周年を迎える本学は、次の100周年に向けた歩みを踏み出しています。在学生の皆さんには、言語を通して世界を深く知り、問いを持ち続け、その力を社会に還元してほしいと願っています。卒業生・保証人の皆さまには、引き続きの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

本学が育てたいのは、言語と文化を深く学び、異なる人・社会・世界と対話する力、多様な価値観や社会課題を読み解く力、そして新たな価値とつながりを創り出す力を備えた人材です。

世界が複雑さを増し価値観の違いが顕在化する時代において、本学は言語を核とした多文化理解と価値創造を通じて、人と社会の新しいつながりを生み出す人材の育成を使命としています。学長として、この使命を未来へと確かに継承し、本学が社会から信頼され続ける学びの場であり続けるよう、全力を尽くしてまいります。皆さまの変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

Message 学長就任のごあいさつ

学校法人京都外国語大学 理事長 ／ 京都外国語大学・京都外国語短期大学 学長　北 寿郎

▶「KUFS VISION 2027」へのご意見をお寄せください

本学が掲げる将来ビジョン「KUFS VISION 2027」について、在学生・卒業生・保証人をはじめ、学園に関わる皆さまのご意見をお待ちしております。VISIONの内容および回答フォームにつきましては、21ページをご参照ください。

LOGOS
学園通信ロゴス
Vol.71 | 2026.9

「LOGOS」は、ギリシア語に起源する言語、理性、思想、論理を意味する言葉です。「言語を通して世界の平和を」の本学の建学の精神に因んで、呼びやすい名称としました。


P.04


P.08


P.10

表紙写真：4号館・西門間広場

CONTENTS

02 Message 学長就任のごあいさつ

04 特集　若者が動かす ― Colloquium ―
国連加盟70年、外交の未来。
本学理事　佐藤 地さん × 本学園の大学生・高校生

08 羽ばたく卒業生
在マナウス日本国総領事
宮川 雄一さん
英語ヨガスタジオ「Little Yoga Retreat」代表
マックガーガン 汐梨さん

12 輝く在校生たち
野口 七海さん（外国語学部 英米語学科4年次生）
久保 翔子さん（外国語学部 英米語学科3年次生）
橋本 愛美さん（国際貢献学部 グローバルスタディーズ学科3年次生）
渋谷 りんさん（京都外国語専門学校 英米語学科1年次生）
武藤 功樹さん（外国語学部 英米語学科4年次生）
レンジェル・リリさん（留学生別科）
田中 姫麻さん（京都外大西高等学校 国際文化コース2年生）
宮本 愛海さん（京都外大西高等学校 グローバル特進コース3年生）

16 研究最前線
「使う力を、伝える力へ変える身体知としての日本語教育」
外国語学研究科長 日本語学科 由井 紀久子教授

18 学園日誌ハイライト
20 高等学校 クラブ戦績等
21 「KUFS VISION 2027」パブリックコメント募集
22 インフォメーション／ホームカミングデー／編集後記
24 思い出の、あの景色。

国連加盟70年、外交の未来。

日本が国連に加盟してから、２０２６年で70年になる。戦争、気候変動、貧困、ジェンダー平等――一国だけでは解けない課題が世界を覆う一方で、「国連は本当に機能しているのか」という問いも突きつけられている。今回、本学理事であり、国連大学理事の佐藤地（ひろし）さんを迎え、まず国連と外交の現在地を語ってもらった。その内容を受けて、模擬国連に取り組む本学園の大学生・高校生が、自分たちの学びを言葉にした。

JUEMUN
(Japan University English Model United Nations)の
詳細はこちら▶

関西高校模擬国連の
詳細はこちら▶

Chapter 1　佐藤地理事 特別講話

動かぬ国連、という現実の先に

理想だけでは守られないルール

「最近よく『国連が機能していない』と言われます。私は、機能していない部分もあるし、引き続き機能している部分もある、あるいは新たに機能している部分もあると思っています」

佐藤地理事はそう切り出した。ウクライナに対するロシアの侵攻のような問題について、国連が何をしているのかと言われると、なかなか理想通りにはいかない。だからこそ、そもそも国連とは何なのかを振り返る必要があるという。

「国連には二つの顔があります。一つは、国連そのものが動く主体、アクターとしての国連。もう一つは、国々が集まり、協力するための場、シアターとしての国連です」

3海里から12海里に拡大されると、狭い幅の海峡が領海に含まれてしまう。そこで、領海よりは自由で、公海よりは制約のある「国際海峡」という制度を、米ソを含む各国が合意して作り上げた。貿易ルールも同様で、どの国も同じ条件で競争できるＭＦＮ（最恵国待遇）の原則が、消費者と国際経済全体の利益をもたらした。

「中長期的に見て国益にかなうから、あるルールが作られ、守られてきた。ただ今は、関税や安全保障上の理由でそのルールが揺らいでいる。だからこそ、新しい状況に応じて、関係国で利害を調整し、みんなが守れるルールを作り直していくことが課題になっています」。

信頼は、遠い島国にも届いていた

日本は１９５６年に国連に加盟して以降、誠実に国際社会と向き合い、信頼を積み上げてきた国だと佐藤理事は言う。その象徴的なエピソードが、南太平洋での経験だ。

「フィジーやパプアニューギニアなど、人口５，０００人ほどの小さな島嶼（とうしょ）国もある。そうした国々を担当する課にいたとき、日本のＯＤＡが機能しているかを確認しに現地を訪れました。現地の担当者から言われたのは、『日本の支援は、その国の発展のために考えてくれている』という言葉でした」

日本の支援は、まずその国がどうすれば発展できるかを考えてなされてきた。それによってその地域が発展すれば、ひいては自国企業のためにもなり、信頼を得て日本の外交カードにもなる。こうして中長期的には日本の国益にもつながるが、第一義的には相手国の繁栄を願う姿勢が、遠い島国の人々の心にも刻まれていたのはうれしいことだった。



Chapter 2　模擬国連参加者との対話

「合意できない」ことから、外交は始まる

大国同士がぶつかる現実

佐藤理事の話を受けて、大学生・高校生との対話が始まった。口火を切ったのは、ＪＵＥＭＵＮでデリゲート・リーダー・チェアパーソンを経験してきた京都外国語大学４年次生、ジョイス・オン・シ・ミンさんだ。

「デリゲートの方が少しつらいと思いました。私が代表していたのはイギリスで、アメリカを代表していた学生と意見が合わず、ちょうとした言い合いになってしまった。みんな価値観も違うし、譲れない部分もある。決議を作るために集まっているのに、その過程でぶつかってしまうんです」

テーマは気候変動だった。佐藤理事はここで重要なことを指摘する。

国際社会には中央政府がない。立法府、行政府、司法府が統一的に統治するという仕組みがない以上、国連が動くためにも、結局は主権国家が協力しなければならない。安全保障理事会も、主要国が協調して国際の平和と安全を維持しようという考えのもとで作られた。ところが、その主要国が他国に侵攻するようなことが起こると、前提からしてうまくいかなくなる。

「それは基本的には、主権国家が並び立つ国際社会の現実を改めて思い起こさせるものです。そこから出発して、今後どうすべきかを考えなければならない」。

国際法が守られる理由

では、なぜ国際法は作られ、守られるのか。佐藤理事は二つの例を挙げた。

捕虜の待遇に関する国際人道法は、自分の国民が捕虜になったとき人道的に扱ってもらいたいから、相手の捕虜も同様に扱うという相互の利益から生まれた。海洋法もそうだ。領海が



「UKとUSが気候変動について議論したら、すぐに合意できませんよ。それぞれの国によって考え方は違うし、なぜそうなっているかも違う。でもね、意見が違うということが分かるだけでもいいんです。その違いの上に立って、それでも何ができるかを考えることが出発点なんです」

途上国はまた全く違う立場を持つ。インドとインドネシアでも意見は異なる。だからこそ、「しないよりした方がいいと皆が思える合意」を模索し続けることが大切だという。

相手の「できない」理由を聞く

では、折り合いがつかないとき、どうすればいいか。佐藤理事は実際の外交の場での経験から語った。

「相手が『できない』と言う時、なぜできないのかを聞く。そのうえで、それでも何ができるかを考える。相手は個人ではなく、国として判断している。国内の事情を理解しないと、妥協点は見出せません」

同じく4年次生の遠藤由姫衣さんは、対話の積み重ねをこう受け止めた。「合意できなかったことは失敗ではなく、次につなげるための一歩なんだと整理できました。まず相手を理解しようとすること、それが出発点なんだと感じました」

実際、模擬国連では合意に至らなかったケースも出た。佐藤理事は「決まった会議期間の中で解決できない場合、双方の主張をそのまま決議案に残す形をとることがある。喧嘩別れではなく、記録として次につなげる。一回で解決しない難しい問題があっても、対話を続けた事実が次の合意の礎になる」と補足した。

↘

Chapter 4 若者へのバトン

厳しい時代だからこそ、あきらめない

好きなものが、壁を開ける

「戦後、国際社会はリベラルな未来に向けて希望に満ちていた。しかし最近、必ずしもそうではなくなってきている」。佐藤理事はそう語りながら、それでも若者たちへのまなざしを和らげた。

「そんな厳しい時代にあっても、皆さんが模擬国連なりかねない。だからこそ、分からなかったら分かるまで聞き続けることが大事だと実感しました」

ジョイスさんが強調したのは、〝伝える〟側の責任だ。

「自分が正しく説明しないと、相手に誤解される。言葉を尽くして丁寧に説明すれば、分かってもらえる。その経験を重ねることで、いい決議が生まれると学びました」

高校生の間宮さんも、議長として英語の難しさに直面していると話した。「議長は誤解を生まないことが大切。丁寧な国連英語を話さないといけないし、それがリハーサルを通して身に染みる。本番が本当にドキドキです」

佐藤理事はここで自らの留学体験を重ねた。アメリカで講義が聞き取れず、授業によく出ていた学生に日本食を振る舞い、ノートを借りた。「言葉がうまく通じなくても、提供できるものがあれば人はつながれる。芸は身を助けるとはよく言ったものです。ダンスでもいい、料理でもいい、自分が持っているものを差し出すことが、国を越えた関係の出発点になる」。


間宮 菜月
MAMIYA Natsuki


中澤 柚月
NAKAZAWA Yuzuki


木村 天祥
KIMURA Tensho


栗原 凛
KURIHARA Lin

京都外大西高等学校 国際文化コース 3年。
座談会は6月1日、第36回関西高校模擬国連大会（6月17日～19日、国立京都国際会館）の二週間前に行われた。

模擬国連参加者との対話

声の大きさだけではない、議場を動かす力

高校生4人は全員、模擬国連の「議長」役を担う。木村天祥さんが議長役に惹かれた理由が印象的だった。「前に出て話すことより、会議全体を回す役割の方が面白そうに見えた。場の流れを見て、必要なところで声をかけて、議論を前に進める人がいる。その役割がすごく面白そうに見えたんです」

リハーサルでの経験を語った間宮菜月さんは、議長の難しさをこう表現した。「議長は全ての流れや役割、各国の発言の内容を把握していないと会議を回せない。いろんな国が自分の国として発言したいことを持って参加するので、それに対してどう対処していくかが不安でもあります」

栗原凛さんは、議長として他国に深く干渉することの難しさを話した。「議長という立場は、現代でいうアナウンサーのような役割。深く干渉するのはよくない。でも、揉め事や大きな出来事があった場合には、感情に動かされず、冷静にルールに沿って、何がダメなのかを明確に伝える努力が必要だと思っています」

中澤柚月さんはスウェーデンの代表として、日本との違いを考えるきっかけを得た。「スウェーデンは世界に比べても男女平等が進んでいる国だと思います。調べてみると、日本にはない政策や、男女を区別しない言葉があることを知りました。いろいろな国を調べることで、自分の国のことも見えてきます」

佐藤理事は議長の役割についてこう補足した。「議長が信頼されるためには、中立でなければならない。でも、それ以上に大事なのが、公平に見られることです。そして、廊下外交と呼ばれる根回しも大事です。普段から信頼関係を築き、貸し借りを積み上げておく。外交は嘘をついてはいけないし、中長期的な個人の信頼関係を大切にしなければならない」。


ジョイス・オン・シ・ミン
JOYCE ONG SI MIN

京都外国語大学4年次生。JUEMUNなどの模擬国連で、デリゲート、リーダー、チェアパーソンを経験。


遠藤 由姫衣
ENDO Yukie

京都外国語大学4年次生。JUEMUN、Asia Youth International Model United Nationsなどに参加。


佐藤 地
SATO Kuni

国連大学理事。外務報道官、ユネスコ代表部特命全権大使、駐ハンガリー特命全権大使などを歴任。

Chapter 3 相手を動かす言葉の力

議場で試される、対話の力

「発言しない」言葉もある

第3部のテーマは「言葉の力」。外交の場で言葉をどう選ぶか。佐藤理事が語ったのは、意外にも「言わない」という選択の重さだった。

ある国際機関の長の選挙の際、候補者から「支持してもらえないなら、支持できないだけは言わないでほしい」と頼まれたことがあるという。

「自分には能力も意欲もあって務まると思うから支持してくれ、というのが本音なんですよ。だけれども、もしそれがダメな場合でも、そうは言わないでくれ、と。これは現実を直視した、単にがむしゃらに支持を求めるよりよほど効果的な言葉でした。発言しない言葉というものがあるんだ、と感じた瞬間です」

条文の起草でも、微妙なことが起きる。国連の文書が長くなりがちなのは、A国はこれを書きたい、B国はこれを書きたいという各国の利害を調整した結果だからだ。どちらとも読める曖昧な表現が、かえって広い合意を可能にする場合がある。

「難しいと思ったら、書いた人に聞くのが一番早い。でも、もっと力があれば、自分が書く側に立つことが大事です。書いた方が主導権を持てる。起草できるということは、相手の事情を熟知し、どこで妥協できるかを分かった上で書いているということですから」。

英語の壁と、あきらめない姿勢

言葉の力について、大学生二人はそれぞれの実感を語った。遠藤さんが直面したのは、専門用語の壁だ。

「模擬国連で使われる英語は日常とは違う。うまく読み取れないことがある。理解しないまま決議を作ってしまうと、合意していないのに合意したことに

↖

人にもそう思ってもらえるような関係を積み上げていく。そうして世界が広がっていく。皆さんは好奇心旺盛だし、向上心がある。厳しくてもあきらめずに、いろいろな課題に取り組んでいってほしい」

廊下外交も、条文起草も、合意形成も、すべて誰かと誰かが向き合うところから始まる。模擬国連の議場で試された言葉の力、相手を理解しようとする姿勢、あきらめずに対話を続ける粘り強さは、実際の外交の現場に確かにつながっている。

国連加盟から70年。次の70年を歩むのは、今ここにいる若者たちだ。「厳しくてもあきらめずに」という言葉を胸に、彼らは既に、自分たちの外交を始めている。

後日談 ――本番を終えて

この座談会が行われたのは、大会本番の約一週間前。緊張と期待を抱えたまま語り合った四人は、その後それぞれの議場に立った。栗原凛さんが、本番を終えたいまの実感を寄せてくれた。

私は当初、模擬国連では事前にどれだけ知識を身につけるかが重要だと考えていた。しかし実際の会議では、事前に準備した言い回しを使う場面は多くなかった。出された意見によって議論の方向が変わり、その場で新たな提案や課題が生まれる。自国の立場を踏まえながら、他国の考えを受け入れ、時には自国の考えを修正することが求められた。知識は出発点にすぎず、他者と共に考え続ける力の方が重要であることに気づいた。また、他者の意見をつなぎ、議論を整理し、周囲が発言しやすい環境をつくる人の存在が、会議を支えていることを知った。現実の国際社会には簡単な正解は存在しないからこそ、対話を重ね解決策を模索していく必要がある。―栗原凛

自分を知ることが、世界への入口になる

中澤さんも、留学で視野が広がった一人だ。「明確な夢はまだない」と前置きしつつ、以前は英語が話したくて英語圏にばかり関心が向いていたと振り返る。だがニュージーランドで韓国人やドイツ人と交わるうちに、英語圏以外の言語や文化も知りたくなったという。「いろいろな国に行ってみたい」。模擬国連で芽生えた好奇心は、留学を経てさらに大きく育っていた。

遠藤さんが話を向けたのは、長崎出身という自分の原点だった。「世界を変えたいと思っていたのに、自分が育った場所のことも知らなかった」。昨年から長崎のイベントに参加するようになって気づいたことがあるという。「ヨーロッパ出身のエデュケーターの方に『若いうちは教育を受けるように』という言葉をもらって、はっとした。まず自分が学ぶことが原点なのかもしれない、と。誰かを助けるためにも、先に自分が学ぶことが必要だと思い始めています」

シンガポール出身のジョイスさんは、「京都に来て世界が広がった」と語る。「自分が見ていた世界は、思っていたより狭かった。模擬国連で違う価値観を理解することの大切さを学んだ。これからも人と関わりながら、道を広げていきたい」。

外交は、人と人の間にある

佐藤理事は最後にこう語った。「国と国との関係も、突き詰めれば人と人との関係です。好奇心を持って、人と話し、自分を豊かにしていく。

在マナウス日本国総領事

宮川 雄一さん

MIYAGAWA Yuichi

直感で選んだ言葉が、やがて国と国のあいだに立つ仕事になった。



撮影場所：少林寺拳法部道場

スペインのホテルで、宮川雄一さんはテレビ画面を見つめていた。ペルーの日本大使公邸が占拠されたという報道だった。ほどなくフロントにファクスが届き、帰任を促す連絡が入る。新婚旅行の予定を切り上げ、赴任先のボリビアへ急いだ。外交の仕事を思い返すとき、宮川さんの記憶に残るのは、そうした瞬間だ。

華やかなレセプションや要人との会談、州知事や市長との意見交換といった「外交官ならでは」の仕事も確かに数多くこなしてきた。しかしその裏側には、標高3，700メートルのラパスで沸点の低い鍋に苦戦し、内戦の傷痕が残るアンゴラの復興現場を走り回り、政治的混乱が続くベネズエラの激変を目の当たりにするといった、予想外の危機対応や過酷な環境での日々があった。机上の交渉だけではない、現場の緊張感が、宮川さんの外交官人生を彩ってきた。

現在の任地は、ブラジル北部の都市マナウス。アマゾンの奥深くに位置するこの町に、日本国総領事館が置かれている。外務省入省以来、宮川さんが向き合ってきたのは、ポルトガル語圏とスペイン語圏の社会だった。ブラジル（リオデジャネイロ）を皮切りに、ボリビア、ベネズエラ、ポルトガル、アンゴラ、パラグアイ、ホンジュラスを経て、再びブラジルへ。ポルトガル語圏での勤務は通算11年、スペイン語圏は12年半に及ぶ。

外交官を志して大学を選んだわけではない。東京で育ち、大学は関西へ出てみたいと思った。京都で暮らしてみたいという思いもあり、数ある大学案内のなかで目に留まったのが、京都外国語大学のブラジルポルトガル語学科だった。「親がスペインとかポルトガルが好きで、その影響もあったのだと思います」と振り返る。

学生時代は少林寺拳法部に打ち込み、アルバイトにも多くの時間を費やした。「もう少し真面目に勉強しておけばよかった」と笑う一方で、「今思うと、本当に恵まれた環境でした」とも。専門性の高い日本人教員とネイティブ教員に学び、言葉だけでなく、その背景にある地域性や文化まで吸収できたからだ。

卒業後、すぐに就職はせず、アルバイトでお金を貯めてポルトガルへ渡った。リスボンで語学コースに通い、現地で暮らす中で日本大使館の関係者とも知り合った。そのとき初めて外交官という仕事に触れ、意識するようになったという。「外国にいながら、日本のために働く。国民のために働く。公のための仕事として、面白いと思いました」



マナウス市議会での「日本移住地区制定」特別セッションにて（前列左から3人目が宮川雄一総領事）。

またいだ国境の数と、つないだ絆と

その後、リオデジャネイロ日本総領事館に派遣員として入り、外交の現場に足を踏み入れた。在マナウス日本国総領事館の管轄は、アマゾナス州、ロライマ州、ロンドニア州、アクレ州の4州に及び、その広さは日本の約6倍に達する。ロライマ州ではベネズエラ国境の避難民受け入れ状況を視察し、日本政府の支援が現地でどのように活かされているかを自らの目で確かめた。総領事の仕事は、机の上だけで完結しない。現地社会、日系社会、日本企業をつなぎ、その関係を深めていくことも大きな役割だ。着任にあたって宮川さんが掲げた「顔の見える総領事館」という言葉には、その仕事の重心がよく表れている。

マナウスには日系社会の厚い歴史があり、マナウス自由貿易地域（ＺＦＭ）には40社以上の日本企業が進出している。売上全体の約2割を日本企業が占めるとされる。州知事に会い、市長に会い、大学を訪ね、港湾関係者と意見を交わす。邦人保護では警察幹部に協力を求め、海軍司令官にも挨拶に向かう。そうした往来の中で、総領事館の仕事は、国と国（あるいは地域）との「信頼関係」という形になっていく。

マナウスでは近年、「日本移住地区」が正式な地区名として制定された。マナウス市議会の特別セッションに出席した宮川さんは、「日系人の方々にとって、本当に大きなことだったと思います」と話す。土地に名前が付くというのは、移住の歴史が公に認められ、先祖の歩みが地図の上に刻まれるということに他ならない。

こうした現場で、宮川さんが最も大切にしているのは、日本人の安全を守ること。邦人保護は外交の最優先事項であり、警察や軍との日常的な信頼関係がその基盤となる。一方で、日系社会や現地要人との「顔の見える交流」は、単なる儀礼を超えた国益に直結する。フリーゾーンでの日本企業の活躍を支え、避難民支援で日本の貢献を目に見える形にし、文化交流を通じて相互理解を深める――そうした積み重ねが、目に見えない「信頼」という大きな財産を生み出していく。



ホンジュラスの伝統的な公式衣装に身を包み、式典に臨む。日の丸の旗を振る子どもたちに温かく迎えられた。



みやがわ ゆういち

1991年度 ブラジルポルトガル語学科卒業

東京都出身。大学卒業後、ポルトガルで学び、外務省へ。ブラジル（リオデジャネイロ）、ボリビア、ベネズエラ、ポルトガル、アンゴラ、パラグアイ、ホンジュラスなどで勤務し、2024年9月、在マナウス日本国総領事に着任した。ポルトガル語圏・スペイン語圏での経験を重ねながら、日本と世界をつなぐ仕事を続けている。

心身を鍛え上げた、若き日の原点。大学時代は少林寺拳法部での稽古とアルバイトに明け暮れる日々を送った。



英語とヨガで、
子どもたちに
「ありのままでいい」と
伝えたくて。

英語ヨガスタジオ「Little Yoga Retreat」代表

マックガーガン汐梨さん

MCGURGAN Shiori

人と違うことは、その人らしさ

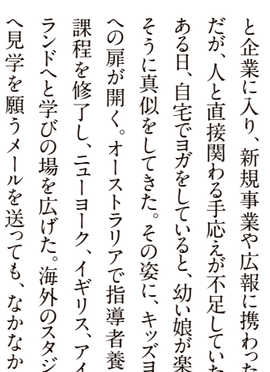
大阪・放出（はなてん）。かつてシャッターの下りていた商店街が、いま多彩な店の集うエリアへと生まれ変わっている。「放出栄町商店街再生プロジェクト」で息を吹き返したその一角に、英語ヨガスタジオ「Little Yoga Retreat」はある。マットの上で子どもたちが英語の声かけに合わせて体を伸ばし、伸び縮みするボールを手に、息を吸って吐く感覚を確かめる。代表を務めるのが、マックガーガン汐梨さんだ。

「ヨガというと、ダイエットや難しいポーズを思い浮かべる方が多いのですが、本来は心と体の両方を整えるためのものです。」と汐梨さん。キッズヨガでは、ポーズだけでなく歌や絵本、ゲーム、制作なども織り交ぜ、子どもたちが楽しみながら心身を育んでいく。スタジオ名に込めたのは、「家でも学校でもない第三の居場所」という思いから。勝ち負けや評価から少し離れ、「ありのままの自分でいいと感じられる時間を届けたい」と力を込める。

英語との組み合わせにも理由がある。英語の発音で使う口や舌、呼吸の筋肉と、ヨガで意識する体の使い方には共通点が多い。英語への苦手意識や口呼吸といった、日本の子どもが抱えがちな課題にも、遊ぶように向き合えるのではないか。自身の学びと経験を掛け合わせてたどり着いたのが、国内ではまだ数少ない「英語×子ども×ヨガ」というレッスンだった。

スタジオを構えた。北アイルランド出身で、来日以来教育に携わってきた夫のシェーマスさんが、英語母語話者の視点からレッスンづくりを支える。

「人と違うことは弱みではなく、その人らしさ」。高校の留学先で多様な仲間と出会い、汐梨さんはそう考えるようになった。レッスンでも、英語の正しさやポーズの上手さより、「自分はどう感じたか」「どう表現したいか」を大切にする。目指すのは、勉強する英語ではなく「使いたくなる英語」だ。「語学は目的ではなく、人と人をつなぐ手段」。異なる文化や価値観を理解し、信頼関係を築く力こそ大切だと考えるその思いは、本学の建学の精神「PAX MUNDI PER LINGUAS（言語を通して世界の平和を）」とも響き合う。「何かを決めるとき、『なぜ?』を最低五回は繰り返してみてください。そこに、自分の軸が見えてきます」。好きな言葉は“Everything happens for a reason.”。すべての出来事には意味がある。目の前の子ども一人ひとりと丁寧に向き合いながら、汐梨さんはその輪を、地域へ、そして世界へと少しずつ広げていく。



シャッター街から生まれ変わった大阪・放出栄町商店街。再生を手がけた人物も本学卒業生で、その一角に「Little Yoga Retreat」を構えた（写真右が汐梨さん）。

英語への憧れの原点は、中学時代にさかのぼる。テレビで、日本語でも英語でも歌い、世界を飛び回る韓国人歌手・BoAさんの姿に触れ、「英語が話せたら、見える世界が広がる」と胸を高鳴らせた。授業で外国人教師と楽しそうに語り合う二人の英語教員が、いずれも京都外国語大学出身だったことも心に残る。「京都外国語大学への進学という道が開かれていること」「留学制度があること」、そして「甲子園で野球応援ができること（笑）」――そんな条件で選んだのが京都外大西高校だった。片道二時間をかけて通い、高校ではニュージーランドへ交換留学。ラクロス部での活動にも打ち込み、校訓「不撓不屈」を体現する仲間に囲まれた日々を送った。



高校時代に参加し、議長も務めた模擬国連。温室効果ガスの削減など、答えが一つに定まらない問題を、各国の立場に立って議論した。（写真右が汐梨さん）

この頃に参加したのが、模擬国連だ。留学経験から英語には自信があったが、他校の生徒たちの発信力に圧倒された。だが、そこは英語のうまさを競う舞台ではない。温室効果ガスの削減、先進国と途上国の隔たり。答えが一つに定まらない問いを前に、各国の立場から意見を持ち寄り、相手の言い分に耳を傾けながら折り合いを探っていく。議長も務めた汐梨さんが実感したのは、立場の異なる人と、正解の見えない課題を共に考える面白さだった。

本学では英米語学科に進み、アロマテラピーへの関心をきっかけに「香りの歴史」を研究した。そして人生を変える出会いが、大学の選択科目のヨガだった。「足ってこんな形をしていたんだ」「呼吸の深さは、その日の気分で変わるんだ」。自分の体への発見が次々と生まれ、心までほどけていく感覚に衝撃を受けた。勝つことがゴールで、常に周囲の評価がついて回る部活動に本気で打ち込んできた汐梨さんにとって、「勝ち負けがなく、誰かと比べなくていい」ヨガの時間は、心地よく、自分に必要なものと感じた。

卒業後は「海外と日本の架け橋になりたい」と企業に入り、新規事業や広報に携わった。だが、人と直接関わる手応えが不足していた。ある日、自宅でヨガをしていると、幼い娘が楽しそうに真似をしてきた。その姿に、キッズヨガへの扉が開く。オーストラリアで指導者養成課程を修了し、ニューヨーク、イギリス、アイルランドへと学びの場を広げた。海外のスタジオへ見学を願うメールを送っても、なかなか返事は来ない。それならばと現地に飛び、扉を叩いて頼み込む。足で築いた縁は、今も最新の指導法を届けてくれる。

日本には、キッズヨガを実践できる場がまだ少ない。「ないなら、自分でつくろう」。妊娠を機に移り住んだ放出で、商店街再生の取り組みに出合い、多彩な店が集うこの場所に



伸び縮みするボールで、息を吸って吐く感覚を体で確かめる。壁に貼られた「JUNE = RESPECT」は月ごとのテーマ。6月はプライド月間（Pride Month）にちなんだもの。英語の声かけとともに、遊ぶようにヨガと呼吸に親しむ。

まっくがーがん　しおり
2013年度　英米語学科卒業

大阪市生まれ。京都外大西高校から、京都外国語大学英米語学科へ進学。ニュージーランド留学や20カ国以上への旅を重ねる。大学の授業でヨガに出会い、オーストラリアで指導者養成を修了。卒業後は企業で新規事業・広報に携わりながら、英文法指導者・ヨガインストラクターとしても活動。2025年4月、大阪・放出に英語ヨガスタジオ「Little Yoga Retreat」を開設した。

輝く在校生たち

未来を担う多様な才能のきらめき…
活気あふれる学園の一端に触れてください。

Discipuli fulgentes

大学生

舞台は一度きりだから

野口 七海さん
外国語学部 英米語学科 4年次生



「刀剣乱舞」をきっかけに殺陣に興味を持ち、「殺陣サークル侍―SAMURAI―」へ入会しました。現在は外大祭での公演を一番の目標に、学内イベントや地域のお祭りなどにも出演。幹部として、組織運営や後輩の指導にも携わっています。

殺陣は相手と刀を交えるだけではなく、互いの呼吸を合わせながら心で対話する演技でもあります。「ケガをしない・させないこと」と「現場を楽しむこと」は当然として、個人的には、本番でイレギュラーが起こっても最後までやり遂げる「The show must go on」の精神を大切にしています。

活動を続ける中では、太秦の小道具制作会社である高津商会さんとのご縁にも恵まれました。見学や製作体験を通して学びを深めるだけでなく、その貴重な経験を新しいメンバーへつないでいけることに、サークルの成長を実感しています。これからも仲間と共にサークルを盛り上げながら、殺陣の魅力を多くの人へ届けていきたいと思います。



竹光（竹や木で作られた刀身）を購入してからは、抜刀や納刀などの技術も向上しました。

大学生

自分らしさを問い続ける

橋本 愛美さん
国際貢献学部
グローバルスタディーズ学科 3年次生

高校時代から憧れていたTEDxの舞台に立ち、自分の考えを英語で伝えることが一つの目標でした。友人から声を掛けられたことをきっかけに登壇を決意し、「Authenticity（真正性）」をテーマにスピーチを行いました。

実はテーマが決まるまでに2カ月以上悩みました。「人前で話せるような特別な経験が自分にあるのだろうか」と考え続けていましたが、自分が最も自然に、熱量を持って話せることは何かを見つめ直したとき、高校時代のカナダ留学での経験を思い出しました。本当はつらくても笑顔で過ごしたり、自分の気持ちより相手を優先したりする中で、「本当の自分とは何だろう」と問い続けたことが、今回のテーマにつながっています。

約12分間の英語スピーチに向けて、授業やアルバイトの合間を縫って練習を続けました。当日は大勢のオーディエンスを前に緊張しましたが、先生方の笑顔や、真剣に耳を傾けてくださる方々の姿が目に入ると、不思議と落ち着きを取り戻すことができました。暗記した原稿を再現するのではなく、一つひとつの言葉を自分の中で確かめながら届けている感覚があり、気づけば緊張よりも楽しさの方が大きくなっていました。

今回の経験を通して、人の心を動かしたり、新しい視点を届けたりすることに大きな魅力を感じるようになりました。自分の考えや経験を発信することで、誰かが物事を考えるきっかけになるかもしれない―その可能性に気づけたことは、私にとって大きな学びです。



憧れの舞台を心から楽しめた本番。前日のリハーサル直前までカラオケに通ったことを今でもよく覚えています。

大学生

「もっと指したい」が原動力

久保 翔子さん
外国語学部 英米語学科 3年次生



普段の対局の一場面です。研究会にも積極的に参加しながら、一局一局を糧に棋力を磨いています。

4歳の頃、棋士である父からルールを教わったことが、将棋との出会いでした。その後しばらく将棋を指すことはありませんでしたが、10歳の時、妹が将棋の大会に出場すると聞き、「私も出てみたい」と参加した大会で初勝利。その嬉しさがきっかけで将棋を再開しました。女流棋士を目指そうと決めた時期があったわけではなく「もっと将棋を指したい」という思いの先に、その道がありました。

現在は研究会で将棋を学ぶほか、イベントや将棋教室での指導にも携わっています。大学では英語を学び、将来は将棋の海外普及にも生かしたいと考えています。海外の囲碁愛好家との交流に呼んでいただいたり、イベントで話題の種になったりと、英語を学んでいること自体がコミュニケーションのきっかけにもなっています。

対局と試験日が重なった際には先生方に相談するなど、大学のサポートにも助けられながら、勉強と将棋を両立しています。これからも勝率を上げるために努力を続け、さらに活躍していきたいと思います。

専門学校生

被災地で感じた、現実の重み

渋谷 りんさん
英米語学科 1年次生



高校時代は地域支援活動部に所属し、東北地方や石川県でのボランティア活動に参加しました。地域の方々との交流や子ども食堂のお手伝いなど、さまざまな活動を経験する中で、人とのつながりや地域に関わることの大切さを学びました。

特に心に残っているのは、被災地を訪れた経験です。東北では震災遺構を見学し、津波の威力や当時の状況を教えていただきました。石川県では、被災から半年ほどしか経っておらず、全壊した家屋や焼け跡が残り、焦げ臭い匂いも漂っていました。映像や写真では伝わらない現地の空気を肌で感じ、自然災害の現実を目の当たりにしたことで、防災への意識はさらに高まりました。

牛や豚を飼養する中で、生と死を間近で経験し、命の尊さを肌で感じました。また、人見知りだった私も、先生方に礼儀やマナーを教えていただきながら少しずつ成長し、信頼していただけるようになりました。高校生活で得たさまざまな経験は、今の自分の大きな財産です。

現在は英米語学科で学びながら、落ち着いたら高校時代に携わっていた子ども食堂のお手伝いにも再び参加したいと考えています。これからも地域とのつながりを大切にしながら、自分にできることを一つずつ積み重ねていきたいと思います。



2年生の時に行った石川県では、地元の高校生とも交流することができ、防災への意識がさらに高まりました。

大学生（留学記）

違いの背景にあったもの

武藤 功樹さん
外国語学部 英米語学科 4年次生



大晦日の夜、ホストファミリーとホストマザーのお姉さんと夕食を囲んだ時の写真です。忘れられない一年の締めくくりになりました。

「外国の文化を知りたい」。そう思ったのは、高校3年生の夏に見た海外インフルエンサーのリアクション動画がきっかけでした。それまで英語は全く話せませんでしたが、その思いから本学への進学を決め、カナダのダグラスカレッジへ9カ月間留学しました。

ホームステイ先では、ホストファミリーが家族のように温かく迎え入れてくれました。休日には一緒に出掛けたり、夕食後には暖炉を囲んで語り合ったりと、かけがえのない時間を過ごしました。また、壊れた物は自分で修理したり、初対面の人とも気軽に言葉を交わしたり、日本との文化の違いを感じる場面も多くありました。そうした違いに接する中で、彼らの今の暮らしがどのような経験や思想に基づいているのか、という背景を知ることができ、海外の文化への理解も深まったように思います。

この9カ月間の留学を一言で表すなら、「感謝」です。家族や友人、ホストファミリーはもちろん、現地で出会った多くの人たちにも支えられたからこそ、楽しみながら成長することができました。

高校生（留学記）

一瞬の勇気がくれた出会い

田中 姫麻さん
京都外大西高等学校 国際文化コース 2年生



親友でもあり今では本当の姉妹のように仲の良いホストシスターとのツーショットです。左が私です。

将来は英語力を生かせる仕事に就きたいという思いから、ニュージーランドへ1年間留学しました。留学生活で最も大きな挑戦だったのは、ホストシスターとの距離を縮めることです。年齢差もあり、最初は話しかけるきっかけがつかめませんでしたが、カードゲームをしている姿を見て勇気を出して声を掛けました。その日を境に一気に仲良くなり、一瞬の勇気がかけがえのない関係につながることを実感しました。

もう一つ印象に残っているのが、イスラム教のお祭り「Eid」です。ホストファミリーから出店の売り手を任されたときは、自分にはできないと思っていました。でも初めて商売を経験する中で、商品を並べるだけでは売れず、相手とのコミュニケーションが何より大切だと学ぶことができました。自分の可能性にフタをせず、何事にも挑戦してみる大切さにも気づくことができました。

留学を通して、以前より積極的に行動できるようになったと感じています。帰国までに親友と呼べる友人をつくり、異文化交流をさらに深めることが今の目標です。この経験を糧に、将来はフライトアテンダントとして世界中の人と関わっていきたいと思います。

大学生（留学記）

「日々是好日」の留学生活

レンジェル・リリさん
留学生別科



留学生の友人と出かけた時に、人生で初めて着物を着ました。美しい景色の中で撮影したのは、とても良い思い出です。

以前から海外で学ぶことが夢で、留学するなら絶対に京都と決めていました。日本人の友人から勧められたことをきっかけに本学について調べ、学生を大切にする姿勢や活気ある学びに魅力を感じて、留学先に選びました。

京都での生活で特に印象に残っているのは、夕方の祇園で初めて舞妓さんを見かけた日のことです。その瞬間、「本当に日本に来たんだ」と実感し、憧れていた場所にようやくたどり着けたような気持ちになりました。日本語能力も向上し、今では日常生活で関西弁を話しています。以前よりスムーズにコミュニケーションが取れるようにもなり、親友と呼べる仲間にも出会いました。一人暮らしをする中で自立し、人としても成長できたと思います。

留学を一言で表すなら「日々是好日」。日本で過ごす一日一日が私にとってかけがえのない時間です。ハンガリーの大学を卒業した後は再び来日し、大学院で言語学を研究したいと思っています。

高校生

応援される「強い人」を目指して

宮本 愛海さん
京都外大西高等学校 グローバル特進コース 3年生



インド・アーメダバードで開催された「第11回アジア水泳選手権」の女子200M バタフライで2位になった時の写真です。

小学3年生から本格的に競泳を始め、昨年度は国スポやアジア選手権に出場しました。中でも印象に残っているのは、初めて日本代表として臨んだアジア選手権です。出発前から不安でいっぱいでしたが、チームメイトが温かく送り出してくれたことで、多くの人に支えられて競技を続けられていることを改めて実感しました。

海外へ行ってからも緊張はなくなりませんでした。それでも、日本で応援してくださる方々に少しでも恩返しがしたいという思いで、自分の持っている力を出し切ることができました。このアジア選手権を通して、たくさんの方々に応援され、支えられて競技を続けられていることに改めて気づき、自分は恵まれていると感じました。

水泳を続ける中で、速さだけを追い求めるのではなく、応援してくださる方々への感謝を忘れず、人として成長することの大切さを学びました。だからこそ、ただ速いだけではなく、誰もが応援したくなる「強い人」を目指しています。大学でも競泳を続けて結果を残し、水泳を通じてたくさんの人の役に立ちたいです。

Inarisusi

使う力を、伝える力へ変える 身体知としての日本語教育

～日本語学科・由井紀久子教授に聞く～

言葉のパワーと、言語教育の危うさと。

太平洋に点在する島々からなるミクロネシア。この地では現在も「デンワ」「ベンジョ」という日本語由来の言葉が使われている。こうした日本語が残る背景を探るため、由井紀久子教授が現地を訪れたのは、1990年代のことだった。

この調査につながる原点は、大学卒業後に勤務した国立民族学博物館にある。研究補佐として働いていた由井先生は、世界各地の集落に入り、生活を共にしながら文化を研究する人類学者たちと出会った。彼らが語る各地の人々や文化は、日本とはまるで違っていた。

「これまで自分は閉じた世界にいたのだな、と気づかされました」

その後、日本語教師となった由井先生。駆け出しの頃には、JICA（国際協力機構）でも教鞭を執った。そこにはアフリカや中東、南米、ニューギニア、フィジーなど、多様なバックグラウンドを持つ人々が集まる。民族学博物館で世界の広さを知った経験は、そうした人たちを自然に受け入れる土台になった。

教育者としての転機となったのが、パラオ・ミクロネシアでのフィールドワークだ。当時、日本語教育研究では、外国人話者が使う中間言語のデータ収集が進んでおり、由井先生はより特徴的なデータを探していた。そんな折、「ミクロネシアに今も日本語を話せる人たちがいる」と知り、日本語の調査に赴いたのだった。

現地で話を聞いたのは、子どもの頃に日本語を学んだ60代以上の人々だ。当時、島ごとに異なる母語を話していたミクロネシアでは、日本語がリンガ・フランカ（共通語）であり、文字言語にはカタカナが使われていたという。それは国の政策として日本語教育を進めた結果でもあった。

「当時は〝そういうもの〟と思って受け入れていた人が大半だったようです。しかしながら、委任統治下にあって、支配国側の言語を学ばされることには、抑圧も当然あったと思います」

実際、高学年の子どもたちが暮らす寮では日本語しか使えないなど、確かに強制力も働いていた。それでも日本に対する否定的な感情がなかったのは、共に暮らす多くの日本人移住者と共に働いたり、余暇を過ごしたり、交流の機会が多かったためだ。

「現地の人に受け入れられていたとしても、言葉にはその国の文化を変えうるパワーがあります。語学教育は時として抑圧的な力を伴うということを、教える側は心に留めておかなければならないと思いました」

ミクロネシアでの経験は、由井先生の教育観にも大きな影響を与えた。学習者が自らの意志で学べる環境をつくること。その考え方が、現在も基盤になっている。

教えるから、支えるへ。

ミクロネシアでの経験を通して、言語教育が強い力を持ち得ることを実感した由井先生。その関心は現在、「人はどのように言葉を使えるようになるのか」へと向けられている。2025年より取り組んでいるテーマは「身体知としての日本語の習得と使用」だ。語彙や文法の知識を身に付けることは、言語学習の出発点にすぎない。その知識はどのようにして〝使える〟状態、すなわちコミュニケーションスキルへと変わるのか。その過程を解き明かそうとしている。

「京都外国語大学の先生方はよく、語学はスポーツや楽器演奏の練習と同じだとおっしゃいます。ルールや演奏法を知った上で、繰り返し練習することで初めてできるようになるという点で確かに似ていますよね。ならばその知見を日本語教育にも還元できるのではないか。そう考えて身体知の研究を始めたのです」

円滑なコミュニケーションには、日本語が〝使える〟だけで十分とはいえない。文法的に正しい文章を組み立てられても、伝わるとは限らないからだ。相手は誰なのか、話す目的は何か、手段は何か。そうした複合的な要素を認識し、それに応じて言葉を選ぶことができて初めて〝伝わる〟コミュニケーションになる。由井先生はそんな観点から身体知の研究を進めている。

一方、伝わるコミュニケーションには、話し手だけでなく、受け手の理解や配慮も欠かせない。そこで由井先生らが共同開発したのが、日本語口頭能力テスト「JOPT」だ。外国人支援に携わる人や国際交流団体の職員など、一度研修を受ければ誰でもテスターになることができる。現在もデータを収集している最中であり、より幅広い人がテストに参画できるよう改良が続けられている。

「外国人の方自身が、自分の日本語能力を知ることで、次に何を学べばよいかが分かります。日本人の側も、その人の日本語レベルを理解できれば、より平易な言葉を選んだり、ゆっくり話したりなど、伝え方を工夫しやすくなります」

日本で暮らす外国人が増え、地域や企業などさまざまな場面で、外国人と日本語で話す機会も増えている。個々の日本語能力を把握できれば、より良い関係づくりにもつながるはずだ。

「今後は、日本で生活する外国人の皆さんが安心して暮らせるようサポートしていくことも、日本語教師の大切な役割になっていくと思います」

そうした役割は日本語教師だけに求められるものではない。地域住民や企業の社員など、外国人と関わる全ての人が、その人の日本語能力や背景を理解し、日本社会で生きていくためのサポートをする。抑圧のない言語教育は、学ぶ人が自らの意志で日本語に向き合い、言葉の背景にある文化を、より素直に受け止められる社会へとつながっていく。



由井 紀久子
外国語学研究科長・日本語学科教授

兵庫県出身。大阪大学文学研究科にて博士（文学）取得。専門は日本語教育学、意味論。大阪大学文学部助手、講師、京都外国語大学講師、助教授等を経て、2011年より京都外国語大学教授。2023年より2026年8月まで日本語プロフィシェンシー研究学会会長。



「JOPT」では、イラストやグラフ等を用いた3ステップの質問によって口語能力を判定する。重視するのは伝わることであり、発音の良し悪しというよりも相手が理解できるかを軸に評価する。

公開問題はこちら ▶



2022年刊行の『日本語プロフィシェンシー研究の広がり』（右）と、2012年刊行の『中級からの日本語プロフィシェンシーライティング』（左）。第二言語としての日本語の熟達度も、由井先生が長年取り組んできた研究テーマだ。

Omoide

Kamaboko

学園日誌

Diarium scholae

ハイライト

大学・短期大学、高校でのさまざまな活動や成果をご紹介。国際交流、学術イベント、学生・生徒の活躍など、幅広いトピックスを通じて、学園の現在の姿をお伝えします。

大学

【地域連携】令和7年度 晴明祭神幸祭巡行に本学学生が参加

2025年9月23日(火・祝)、晴明神社(京都市上京区)で執り行われた晴明祭神幸祭に、本学学生が参加しました。晴明祭は、平安時代の陰陽師・安倍晴明公を祀る晴明神社の例祭で、毎年9月に行われる京都の伝統行事です。学生は地域連携活動の一環として巡行行列に加わり、装束を身にまとって神輿や稚児、鼓笛隊などとともに西陣地域を約4時間かけて巡行しました。参加した学生は、日本の伝統行事への関わりを通じて地域の方々と交流し、その歴史や文化について貴重な学びを得るとともに、地域貢献に対しての意識を高める良い機会を得ることができました。



巡行行列の一員として西陣地域を練り歩く学生

【国際交流】グローバル観光学科の教員・学生が「世界観光ガイド連盟(WFTGA)総会」に参加

2月9日(月)から13日(金)にかけて、福岡市で開催された世界観光ガイド連盟(WFTGA)総会に、国際貢献学部グローバル観光学科の原一樹教授と学生2人が参加しました。WFTGA総会は今回初めて日本で開催され、本学の参加は、本学卒業生で一般社団法人九州通訳・翻訳者・ガイド協会理事の松下奈津子氏の支援により実現しました。学生たちは英語による基調講演やワークショップに参加し、世界各国の観光ガイドの皆さんの熱意に触れ、大きな刺激を受けました。



英語での歌舞伎演武を含めたオープニングセレモニーも開催された

参加学生のコメントはこちら

【創立80周年記念プレイベント】「大学の宝物―大学はミュージアム―」開会式を開催

6月15日(月)、国際文化資料館で学園創立80周年記念プレイベント「大学の宝物―大学はミュージアム―」の開会式を開催しました。理事長・学長や関係者約40人が出席し、テープカットを行いました。本展では、本学が所蔵する美術作品や貴重資料を展示しており、近年学内で新たに発見された岡本太郎のレリーフ作品「眼と眼 コミュニケーション」の習作をはじめ、パブロ・ピカソ、マルク・シャガール、富岡鉄斎、鏑木清方、堂本印象、藤田嗣治らの作品など計33点を公開。本学が誇るコレクションを通して、その歴史と魅力を広く発信する機会となりました。



初公開となる岡本太郎のレリーフ作品「眼と眼」の習作



(左から)テープカットを行う森田理事、北理事長・学長、近藤副学長・国際文化資料館館長

【稀覯書展示会】京都府立図書館・京都外国語大学付属図書館共催展示会を開催

6月5日(金)～6月14日(日)、京都府立図書館との共催により、稀覯書展示会「自由への羅針盤―アメリカ250年を刻む書物たち：CHRONICLES OF LIBERTY」を4号館で開催しました。京都府立図書館と本学付属図書館が所蔵する約60点の貴重資料を展示し、ジョージ・ワシントンの直筆書簡をはじめ、マーク・トウェイン、アーネスト・ヘミングウェイ、エドガー・アラン・ポーの初版本、一恵斎芳幾の錦絵などを公開しました。日米の歴史と自然への理解を深める機会として、多くの来場者が貴重な資料に見入っていました。



展示会の様子



約60点の貴重資料

高等学校

【ユネスコ部】YRE国際年間コンテストに応募し、最終選考へ進出

4月下旬に、本校ユネスコ部の4名が「YRE国際年間コンテスト」に参加するため、食料安全保障に関するポッドキャストを作成、応募の結果、最終選考に進出しました。さらに、その模様は「京都三条ラジオカフェ」にて放送されました。また、今年のコンテストには約40カ国から応募があり、日本からの参加は本校のみでした。

本校生徒が作成したポッドキャストでは、「日本は輸入に頼る国ですが、気候変動や世界情勢の影響を考えれば、それは安全と言えるでしょうか？日本の食料自給率を上げるために、私たちに出来ることは何でしょうか？」などについて議論しました。

※YRE(Young Reporters for the Environment)とは、若者がグローバル規模の問題や環境問題について調査・研究し、解決策を共有するための国際的なネットワークおよびプラットフォームです。



食料安全保障をテーマにポッドキャストを収録するユネスコ部員

本校のユネスコ部を含む最終選考に残った団体のポッドキャストは、こちらの二次元コードより聴くことができます。

【体育祭】熱気はそのまま、新たなステージへ！初の室内開催で魅せた一体感

6月25日(木)、今年度から室内開催へと舵を切った本校の体育祭。

当日の天気は雨でしたが、天候の心配がない快適な環境のなか、全校生徒の熱量はいつも以上に高まっていました。競技中の大歓声がアリーナ全体に響き渡り、学年の枠を超えて学校全体が一つになって盛り上がる姿が印象的でした。

新しい体育祭のカタチとして、西高体育祭は素晴らしいスタートを切ることができました。



玉入れに白熱する生徒たち



会場いっぱいに響く声援が選手を後押し

パブリックコメント募集

京都外国語大学は学園創立80周年を機に、次の10年を見据えた「KUFS VISION 2027」を策定しています。今後の教育のあり方について、皆様のご意見をお寄せください。

KUFS VISION 2027 ―80周年を、100周年への出発点として―

少子化・AIの進展・生涯学習需要という三つの構造変化が重なる今、KUFSは縮小均衡にとどまることなく、新しい外国語大学モデルを切り拓きます。本ビジョンは、自ら変革を推進する大学へと生まれ変わるための羅針盤です。

1 ミッション（使命）

本学は、言語を核とした多文化理解と価値創造を通じて、人と社会の新しいつながりを生み出す人材を育成します

育てる人材 —— 三つの力

つながる力 …言語と文化を深く学び、異なる人・社会・世界と対話する
読み解く力 …多様な価値観・文化・社会課題を、質的理解とデータ分析の両面から読み解き、本質を見抜く
創り出す力 …対話と理解を起点に、新たな価値とつながりを生み出す

2 戦略と重点施策

既存の強みを徹底的に深耕しながら、その土台の上に新しい価値を積み上げる「両手遣い」の姿勢を経営戦略の基本とします。語学教育とAI活用の深化、大学院の充実や留学生の受け入れ拡大、卒業生5万人との再接続などにより既存の強みを伸ばす一方、教育改革や社会連携、日本語・日本文化教育の拡充など新たな挑戦にも取り組みます。

3 キャンパス整備

安全性と教育機能を高める中期キャンパス整備マスタープランを策定し、**キャンパスの全面更新を進めます**。**80周年に向けて新校舎を建設するとともに、7・8号館の建設にも順次着手**します。

4 将来に向けた展望 ―100周年を見据えて

「外国語を学ぶ大学」から**「外国語を通して世界とつながり、社会に価値を創る大学」**への再定義を目指し、日本語・日本文化教育の発展、大学院の研究拠点化、卒業生エコシステムの確立、通信制・オンライン教育の展開を進めます。

結語

80年の歴史で培ってきた語学教育の蓄積と、多文化が交差するキャンパスという唯一無二の資産を礎に、KUFSは変化する社会の要請に正面から応える大学へと生まれ変わります。80周年を、100周年に向けたステッピングボードとして。

学校法人京都外国語大学 理事長　／　京都外国語大学・京都外国語短期大学 学長　北 寿郎

それぞれの取り組みについての詳細は**コチラ**からご確認ください。

パブリックコメントはコチラから
募集期間　**2026年10月20日まで**

【高等学校 クラブ戦績等】

■空手道部

第79回国民スポーツ大会空手道競技会/わたSHIGA輝く国スポ・障スポ2025
（2025年10月5日～10月7日）
[滋賀県立体育館（ウカルちゃんアリーナ）]

○少年男子組手（滋賀県代表）
　優勝　　渡部空夢 ※二連覇
○団体組手（京都府代表）
　準優勝　崎中舜矢

第45回近畿高等学校空手道大会
（2025年12月19日～12月21日）
[兵庫県立武道館]

○男子団体組手　　優勝 ※二連覇
○女子団体組手　　第3位
○男子個人組手
　-55kg　優勝 北橋琉　　第3位 和久田有将
　-68kg　優勝 杉山蒼心　　第2位 飯島楓斗
　-76kg　優勝 山本湊太　第3位 前田太陽
　+76kg　優勝 米丸旺汰
・男子選抜推薦選手・階級優勝者統合戦
　優勝　杉山蒼心
　第3位　北橋琉
　第3位　米丸旺汰
○女子個人組手
　-53kg　優勝　遠藤天和
　-66kg　第2位 三浦由愛
・女子選抜推薦選手・階級優勝者統合戦
　第3位　遠藤天和

第13回東アジア空手道選手権大会
（4月25日～4月26日）
[豊橋市総合体育館]

○ジュニア男子
　-68kg　第3位 杉山蒼心
○ジュニア女子
　-53kg　第3位 遠藤天和

第45回全国高等学校空手道選抜大会
（3月23日～3月26日）
[エア・ウォーターアリーナ松本]

○男子個人組手
　−55kg　第5位　北橋琉
　−68kg　準優勝 飯島楓斗
　−76kg　第5位　山本湊太
　+76kg　優勝　米丸旺汰
○女子個人組手
　-53kg　優勝　遠藤天和

■水泳部

第34回近畿私立中学高等学校水泳競技大会
（5月9日～5月10日）
[インフロニア草津アクアティクスセンター]

○男子
　50M自由形　優勝 太田歩睦
　100M自由形　第3位 太田歩睦
　200M自由形　第6位 前田朱翔
　400M自由形　第4位 前田朱翔
　1500M自由形　第8位 梅田眩吉
　100M背泳ぎ　第3位 河原志侑
　200M背泳ぎ　第2位 加藤勇登
　200M個人メドレー　第6位 加藤勇登
　400M個人メドレー　第4位 河原志侑
　4×100Mフリーリレー　第4位 前田・太田・加藤・高屋
　4×100Mメドレーリレー　第6位 河原・加藤・前田・太田
○女子
　50M自由形　第8位 山本真澄
　100M自由形　第3位 青沼凪紗
　第6位 村上颯月
　第7位 林伽奈英
　200M自由形　第7位 林伽奈英
　第8位 青沼凪紗
　400M自由形　第7位 圖美寿々
　800M自由形　第4位 菅生心菜
　第7位 圖美寿々
　100Mバタフライ　優勝　宮本愛海
　100M平泳ぎ　第8位 川勝小晴
　200Mバタフライ　優勝　宮本愛海（大会新）
　200M個人メドレー　第2位 宮本海咲
　第8位 大鳴美桜
　400M個人メドレー　第3位 宮本海咲
　第8位 大鳴美桜
　4×100Mフリーリレー　第4位 村上・青沼・林英・林伽
　4×100Mメドレーリレー　第5位 青沼・宮本海・宮本愛・村上
　※優秀選手に選出　宮本愛海（２年連続）

第102回日本選手権水泳競技大会
（6月4日～6月7日）
[東京アクアティクスセンター]

・200M背泳ぎ　B決勝 第8位（京都高校新）加藤勇登
・200Mバタフライ　第5位 宮本愛海

■テニス部

第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025　テニス競技
（2025年11月16日～11月25日）
[有明テニスの森]

○女子ダブルス
　準優勝　杉本千明

■吹奏楽部

第24回マーチングステージ全国大会2026
（2月21日）
[フェニーチェ堺（堺市民芸術文化ホール）]

○フェスティバル部門　高等学校・一般の部
　優秀賞ならびに講評者特別賞（最高賞）

□学習面

実用英語技能検定

準1級合格者
2年ICA組　チャーチ ルシアン 大良
2年ICB組　コーネリアス 葵生
3年ICA組　朽網瑠奈
3年ICB組　栗原凛、中山璃子

そのほかにも多くのクラブが日々努力を重ね、学園生活を彩っています。誌面では紹介しきれないクラブの活躍は、ぜひホームページでご覧ください。

ふるさと納税を活用した学生支援ご協力のお願い

本学の学生は、建学の精神「PAX MUNDI PER LINGUAS - 言語を通して世界の平和を - 」のもと、積極的に多種多様な社会貢献活動に取り組んでいます。

京都市ふるさと納税寄付金制度では、京都市との連携協定に基づき、「大学のまち京都・学生のまち京都」の魅力向上につながる取り組みや各大学における地域連携などの取り組みに寄付することができます。寄付金の使い道に「京都外国語大学・京都外国語短期大学」を選択いただくと、返礼品の受け取りとともに本学学生の社会貢献活動を応援できる仕組みとなっています。

京都市ふるさと納税を活用して、ぜひ本学学生の社会貢献活動へのご支援をお願いいたします。



お手続きはこちらから

訃報

謹んでご冥福をお祈りいたします



島本 基 氏（本学名誉教授）

2025年11月26日逝去。96歳。1958年大阪府立女子専門学校を卒業後、関西国際学友会日本語学校講師、大阪外国語大学留学生別科非常勤講師等を経て、1980年京都外国語大学留学生別科講師として着任し、助教授、教授を歴任。長年にわたり外国人留学生への日本語教育に尽力されるとともに、留学生別科長として別科の発展に貢献。また、日本語学科の開設にも深く携わり、学科創設期の基盤づくりに尽力した。1999年本学名誉教授。

創立80周年記念プレイベント

卒業した母校は、一生のアイデンティティ。——ホームカミングデーにようこそ。

創立80周年記念プレイベントとして、京都外大初となる「ホームカミングデー」を2026年11月3日（火・祝）に開催します。
もう一度キャンパスを訪れ、恩師や同級生、後輩と言葉を交わす。そんな貴重なひとときを、卒業生の皆様にお届けします。

当日のプログラム

オープニングでは、北理事長・学長によるWelcome Speech、左近校友会長の挨拶のほか、在学生による語劇祭・外大祭紹介をお届けします。その後は、学生によるキャンパスツアーで、変わらぬ景色と新しくなった学びの場をご案内します。
同日は「外大祭」「語劇祭」も同時開催。ホームカミングデーのプログラムを終えたあとも、終日学内でそのままお楽しみいただけます。

ご来場の皆様へ

当日ご来場の方には、記念の外大グッズや外大祭でご利用いただけるお買い物券など、プレゼントをご用意しています。卒業生の皆様が、恩師や後輩、そして同級生と再びつながる場所に。ぜひこの機会に、母校へ足をお運びください。

詳細情報は、京都外国語大学ホームページ及びALUPA（アルパ）を通じてお知らせします。

開催概要

日　　時：2026年11月3日（火・祝）
10:30～（10:00受付開始）【予定】
※外大祭・語劇祭と同日開催

会　　場：本学キャンパス（京都市右京区西院笠目町6）

対　　象：卒業生・退職教員・現役教職員
※ご家族・ご同伴者も歓迎

参加方法：事前申込制

申込フォーム▶

お問い合わせ　Tel　075-322-6012 / E-mail　homecoming@kufs.ac.jp

大学・短期大学 卒業生アンケートご協力のお願い

教育活動の改善に活用するため、卒業生を対象としたアンケート調査を実施いたします。
何卒ご協力いただきますようお願い申し上げます。



LOGOS Vol.71 読者アンケート ご協力のお願い

アンケートに
ご回答いただいた方の中から、
抽選で3名様に
外大ベアをプレゼント！

締め切り：2026年10月31日（土）23：59迄

アンケート回答フォーム▶
回答時間：約3分

事業・財務情報

学園の収支予算・決算については、こちらからご確認ください。

詳細はこちらから▶

［お問い合わせ先］学校法人京都外国語大学　法人部 LOGOS編集担当　TEL 075-322-6001　E-mail logos@kufs.ac.jp

---

Editor's Room

［編集後記］

今回の特集では、佐藤地理事と、模擬国連に参加した学生たちとのトークセッションが実現しました。リアルな外交の現場を知る佐藤理事のお話や、対話や合意形成の難しさなど、課題に直面しながらも模擬国連に挑む学生たちの姿が印象的でした。世界情勢が大きく変化する今だからこそ、対話し、互いを理解しようとする姿勢を大切にしながら、世界とつながる学びをこれからも未来へつないでいきたいと思います。（J.T）

●住所変更・送付停止のご連絡は、以下までお願いいたします。

大学・短期大学卒業生の方
校友会　TEL:075-322-6057
FAX:075-322-6220

専門学校卒業生の方
専門学校 TEL:075-752-2300
FAX:075-752-9218

高等学校卒業生の方
こちらのフォームからご連絡ください。

卒業生向けサービス

京都外国語大学・京都外国語短期大学 卒業生専用SNS「ALUPA（アルパ）」始まりました



母校を卒業した「環境や悩みの近い仲間」と、卒業後もあたたかくつながることができる本学卒業生専用のクローズドSNS「ALUPA（アルパ）」がスタートしました。利用料は無料です。
大学公式アカウントをフォローすれば母校の「いま」が分かるほか、同級生の近況をチェックしたり、社会人向け講座や研究活動の情報を通じて新しい学びのきっかけを得ることもできます。職歴やスキルを登録できる「マイページ」、情報交換ができる「タイムライン」機能も便利です。
登録は簡単。右記QRコードから仮登録いただくと、後日ご登録のメールアドレス宛に本登録のご案内をお送りします。この機会にぜひご参加ください。

登録はこちらから▶

卒業生向け特典

京都外国語大学・京都外国語短期大学卒業生のみなさまへ 生涯学習講座 無料受講のお知らせ



卒業生の皆様は、生涯学習講座を無料で受講いただけます。
ぜひこの機会に新しい学びをお楽しみください。

◆ 講座の一例

- ・旅の気分でブラジルポルトガル語
- ・たのしいイタリア語会話〈中級〉
- ・トラベル韓国語〈入門～初級〉
- ・The Life, Times and Works of William Shakespeare
- ・たのしい英語〈中級〉

◆ 受講者の声

- ・色々な言語が学べることはもちろん、レベル別の講座や豊富な知識を持つ先生方がそろっているので、選択肢が多いところがとても良いです。
- ・講師の先生がご自身の現場での経験を交えながら、学習者への寄り添い方や、考えさせる教え方を示してくださるので、とても参考になります。（使える日本語を教えてみよう〈入門〉）

※1学期につきおひとり様1講座までとさせていただきます。
※定員を超過した場合は、受講料をお支払いいただく方を優先してご案内いたします。あらかじめご了承ください。



◆ 受講申し込み

春５月開講　申し込み開始 3月下旬
秋10月開講　申し込み開始 8月下旬

詳細はこちらから▶

【お問い合わせ】ランゲージセンター　TEL：075-925-5369

思い出の、あの景色。

Locus memoriarum

Vol.3「カフェ」

青春の日々と、京都の風情が交錯する
思い出と共にたずねる
ノスタルジックな風景物語

2002 → 2026





大学生時代、1日の大半をキャンパスで過ごした私にとって、学食はお財布にも健康にも心強い味方でした。当時、キャンパス内には2つのカフェがありましたが、おしゃれな洋食を提供する「2カフェ」よりも、私は庶民的な雰囲気の「1カフェ」がお気に入りでした。

メニューもユニークで、1・5玉のうどんにきつねと天ぷらの両方がのった「びっくりうどん」や、黒塗りの松花堂弁当におかずが3品、当たりの日にはエビフライまで入った豪華な「外大弁当」など、今振り返ると、あれは調理師の皆さんの学生への愛だったのだとしみじみ感じます。

現在の「リブレ」のようなカフェメニューは一切ないのに、堂々と「カフェ」を名乗るあたり、今のZ世代の学生たちからは突っ込まれそうですが、海外経験もなく地方から出てきたばかりの私は、「さすが京都外大、なんておしゃれ！」と胸を躍らせたものでした。

その後、1号館が建て替わる際、当時の卒業スタッフが学生有志を募って「さよなら1カフェ」という企画を催していたのを覚えています。それほどまでに、学生たちから深く親しまれ、愛された場所だったのでしょう。

今は1号館地下にある「コンパーニョ」が、学生たちの憩いの場として賑わいを見せています。しかし、カウンター越しに焼きそばの鍋を振ってくれたおじちゃんや、うどんを作ってくれたおばちゃんたちとの何気ないやり取りが懐かしい昭和世代の私です。

1982年　英米語学科卒
京都外国語大学 人権教育啓発室長 給田 佳名子

学校法人 京都外国語大学
〒615－8558 京都市右京区西院笠目町6 ☎075-322-6001
https://www.kufs.ac.jp/
京都外国語大学／京都外国語短期大学
京都外大西高等学校／京都外国語専門学校